

◆ 教育現場で活躍する卒業生たち ◆

英語・英語圏文化コース 教員
前田 隆子

カリタス女子短大は、英語科教員の中学校二種免許状が取得できる神奈川県では唯一の短大です。本学の教職課程を履修し、採用試験に合格後、2010年4月から中学校で英語を教えているJ.Y.さん、そして非常勤講師をしながら昨秋採用試験に合格し、この4月から専任教員として教え始めるA.T.さんとN.U.さんからメッセージをいただきました。

◆ J.Y.さん

カリタスを卒業して、もうすぐ1年が経とうとしています。私は今、藤沢市にある公立中学校で英語を教えています。1年目ということで、慣れないことばかりの中、研修も行い、忙しい毎日を送っています。カリタス在学中は、たくさんの先生方に支えられながら教育実習に行き、長期派遣留学制度を使ってアメリカ留学も経験させていただきました。今でもカリタスでの日々が私の心の支えです。今年はクラス担任ではありませんが、1年生の協力担任として、授業を行うほか、学校運営に必要な様々な仕事をしています。部活はバドミントン部を受け持っています。そのすべてを完璧にこなすことはまだ難しいですが、自分なりに精一杯努力しています。

最初の頃は、授業ひとつにおいても、わからないことばかりでとても不安になっていました。深夜まで授業準備をしていたこともあります。今でも、新しい単元で新しい文法事項を導入する時は、生徒がどんな反応をするのか緊張します。しかし授業アンケートを行った際、「英語が楽しい」とか「来年も教わりたい」という声を聞くことができ、丹念に準備した苦勞が報われたように感じました。

中学校の現実には教育実習で垣間見たものとは違います。人相手の仕事なので、うまくいかず、落ち込むときもあります。そのような時にカリタスで学んだあの日々を思い出し、再び生徒たちに真摯に向き合おうと自らを奮い立たせている、そのような毎日を送っています。

◆ A.T.さん



私は今現在、神奈川県の開成町にある公立中学校の教師をしています。担当教科は英語で3学年を受け持っています。昨年の4月から始めたばかりなので、まだ慣れないことも多く、目の前のことをこなすだけで精一杯の毎日ですが、とても充実した日々を送っています。私は短期大学を卒業してから一般企業に就職し、そこで2年間営業事務をしていました。しかし「教師になりたい」という思いが生まれ、教員免許を取得することを決意し、その後本学に科目等履修生として二年間通い、一から教師になるための勉強をしました。他の人より今に至るまで道のりは少し長かったかもしれませんが、遠回りしたとは感じていません。今実際に現場に立って見て、一般企業での社会経験も大変価値あるものであったと感じています。

私が今学校現場に入って一番感じたことは、「先生」というのは「何でも屋」であるし、そうでなくてはならないということです。教師の最重要任務は間違いなく教科指導だと思うのですが、それ以外に従事すべき業務の数の多さに驚きました。例えば、それは毎日の部活指導であり、体育祭や修学旅行など各行事の準備、日常の些細な生徒同士のトラブルやケガへの対応というようなことです。合唱コンクールがあれば歌の指導をし、高校受験が近くなれば生徒一人一人に面接指導をします。私も、その文字通り「何でも」指導できる教師でありたいと思います。

また、私の理想の教師像は「生徒の自主性を育て、尊重する先生」です。生徒に対しては、「子どものハートに火をつける先生」と言っています。つまりは、生徒に何か「やってみよう」と思わせ、それを一緒に応援してあげる先生です。少しでも早く理想像に近づけるよう今現在奮闘中です。

◆ 教育現場で活躍する卒業生たち ◆



◆ N.U.さん

私はカリタス女子短大で中学校二種免許状(英語)を取得し、その後3年次編入した東京女子大学で中学一種・高校二種免許状(英語)を取得しました。そして大学を卒業後すぐ、非常勤講師のお話をいただき、2010年4月～6月まで横浜市の中学校で働くことになりました。1年生のT.T.(Team Teaching)と3年生を3クラス担当しましたが、いわゆる受験生である3年生を預かることには戸惑いと責任を感じました。しばらくは英語科主任の先生やベテランの先生方に助けていただきながら何とか授業を組み立て、こなすといった毎日が続く、常に疲労困憊だったように思えます。ですが、こちらが一生懸命であるほど、生徒たちは大きな反応を返してくれるのです。「そっか、わかった!」と言ってくれた時は本当にほっとしました。その後、1年生のクラスを半分に分けた少人数制クラスを担当しました。1年生ならではの素直な反応、意外な質問に度々驚かされましたが、非常に楽しく授業を進めることが出来ました。最終日には生徒たちがお別れを言いに来てくれて寂しいながらも嬉しく思いました。

9月～12月はカリタス小学校の教員補助の仕事に就きましたが、これには中学校の時とはまた違う大変さと楽しさがありました。主にフランス語の授業の教材作りをしていましたが、授業中はT.T.もしていました。短大で1年間習ったフランス語を必死に思い出しながらアドバイスをするのは本当に苦労しました。また、今年のカリタス50周年イベントがありましたので、その準備と練習は時間との戦いでした。しかし、授業内での児童との会話や準備の合間の交流は本当に楽しくいつでも元気をもらっていましたし、子どもたちの能力の高さには本当に驚きました。また、電子黒板の使用という最先端の授業スタイルを見ることができたことは、私にとって貴重な体験でした。様々なことを任せいただき、実にいい経験が積めたと思います。

この4月からは横浜市の英語科教員(専任)として勤務しますが、これから歩いていく教員人生に、これらの経験をいかしていけたらと思っています。

◆ 海外在住の卒業生 ◆

S.M.さん



私は平成12年にカリタス女子短期大学 英語・英語圏文化専攻を卒業しました。在学中には、少人数教育のもと、レベル分けされたクラスで英語を学ぶことができ、さらに第二外国語としてフランス語も履修し、大変充実した日々を送りました。また夏休みにはアフリカのガーナへの短期留学をし、大学生活を満喫しました。

カリタス卒業後、先生の紹介で、オーストラリアにあるUSQ大学(University of Southern Queensland)に行き、一年間、大学の準備コースで学び、その後大学に編入しました。グラフィックアートに興味があったので、マルチメディアを専攻し卒業しました。カリタスでは先生方が勉学、生活面、進路等、学生に対し熱心に面倒を見てくださいました。私はその温かい環境に慣れていたので、オーストラリアのUSQ大学のシステムに、最初は戸惑いました。もちろんUSQ大学にも、外国人留学生を支援するために論文を見てくださるクラスなどありますが、カリタスほど親身になってくれる所はないのだなあと感じました。

現在、私はフランスで暮らしています。オーストラリア留学中に出会った、フランス人男性と結婚をして、パリに住んでいます。渡仏以前でフランス語を学んだのは、カリタス在学中のときだけでした。幸いそのおかげであまりフランス語に抵抗をもちず学ぶことができました。今私は美術学校で勉強しています。フランスはアートを学ぶのに最適な国だと思います。この国では、議論をすることが大切なので、作品を提出する際には必ず口答試験が強いられます。毎年10月ごろになると、世界中のギャラリーがパリに集まり多くのアート・イベントが行われます。ときには私もイベントに参加し、日本のギャラリーからの通訳などの仕事をしています。見物者のほとんどが外国人であるため、パリにいながら英語の通訳をすることが頻繁にあります。

私はカリタスで勉学だけでなく精神的にも多くの影響を受け、それらのことがその後のオーストラリアでの留学、そして現在のフランスでの生活にも非常に役に立っていると思います。カリタスでの学びを活かして、これからも充実した毎日を過ごしたいと思っています。



◆ “A Letter from the USA” ◆

2010年夏から長期派遣奨学生として Felician College に留学中の A.K. さんから英文レターが届きました。国連でのインターンシップに参加した様子を伝えてくれています。

United Nations Fellows Program

A.K. さん



<前列左端が K さんです>

As part of my studies in the USA, I could participate in a Humanities class which included an internship at the United Nations. It is called the “United Nations Fellows Program.” The term was about two months and during that term I went to the United Nations in New York City every Thursday and attended several briefings. The subjects were different each week. There were topics like Homelessness, Global hunger, Diversity, and so on.

In the briefings, the experts on each issue reported the actions they had taken and what they have to do hereafter to resolve these issues. After the briefings, we had a seminar. In that, we discussed and shared what we learned and what could be a solution. During the seminar,

I could hear various opinions because everyone had a different view even though the topic was the same. It was quite interesting for me. Furthermore, a big conference which was called “United Nations Academic Impact” was held on the last day of my internship. That day, we could see the Secretary-General and Under-Secretary-General.

I have long been interested in international cooperation and organizations like NGOs or the UN, so this experience was something I will remember all my life. Surely, it was overwhelming and I always struggled with English and my weekly papers. Although I sometimes regretted taking this class, I am sure now it was worthwhile for me. Today we have a lot of global issues. This class encouraged me to start thinking what I can do to help and to understand what the United Nations really is. Before I came here, I supposed that the UN was universal. However, it is not. It needs NGOs and our support. Thus, I realized that every single human has to be concerned with global issues present today.

Finally, we made a United Nations Fellows Program page on Facebook as a part of our final project. The aim of this page is to let more people know about the UN and what is happening in the world. So if you have an account on Facebook, I strongly recommend clicking the “like.” Although I have finished this class project, the next students who take the class will keep the Facebook page active. Through this page, we report the briefings and discuss the topics.

Please visit the web page site :

<http://www.facebook.com/pages/The-United-Nations-Fellows-Program-at-Felician-College/147281198652141?ref=ts>

◆ 英米文学の故郷 ◆

英語・英語圏文化コース 教員
伊藤 知子

第 27 回 ニューヨーク その 3

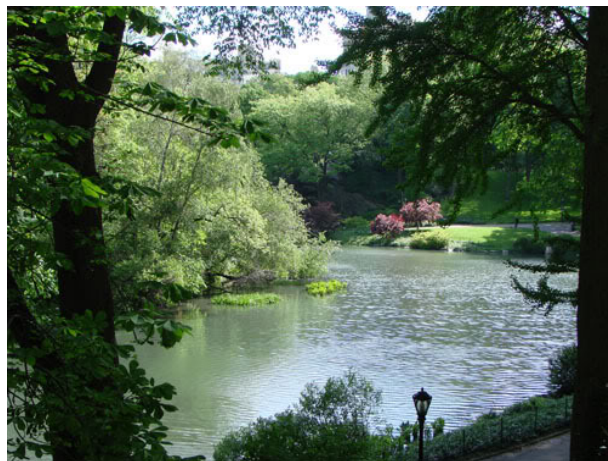


J. D. サリンジャー

年に「ハプワース 16, 1924 年」(“Hapworth 16, 1924”)を発表した後は長年にわたり隠遁生活を続けていました。そして2010年1月にニューハンプシャー州(New Hampshire)の自宅にて91歳で老衰のために亡くなりました。

私がニューヨークを訪れ、セントラル・パークを散策したのは2004年3月でした。大都会の中にこのように緑があり、広い空間の中で人々が思い思いに時間を過ごしていることに感銘を受けました。つい最近の授業で『ライ麦畑でつかまえて』について学びました。サリンジャーがこの小説を発表してブームを巻き起こした時から既に60年の時を経ています。しかし、学生たちがレポートに書いたコメントを読むと、ホールデン少年の世の中の偽善を嫌い、純真さを求める気持ちは、現代の学生たちにも共感できるものであることが分かり、うれしく思いました。

ジェローム・デイヴィッド・サリンジャー(Jerome David Salinger, 1919-2010)は、アメリカの小説家です。彼は1919年にニューヨーク州(New York)ニューヨーク市に生まれました。父親はユダヤ系で食品輸入業を営む裕福な家庭でした。ニューヨーク大学に入学しましたが中退して、その後コロンビア大学の創作コースで学び、小説を書き始めました。1951年に発表した長編小説『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*)は、口語文体で語られており、若者たちの人気を得てベストセラーとなりました。この作品にはホールデン・コールフィールド(Holden Caulfield)という16才の少年がクリスマスの頃、高校を退学になった後に、すぐには家に戻ることが出来ずにセントラルパーク(Central Park)を含めてニューヨークのあちこちを放浪する数日間の体験が描かれています。その中でも印象深いのは、彼がセントラルパークの池のアヒルたちが冬になり池が凍った時にはどこに行くのだろうと心配し、実際に池を訪れてみる場面です。彼がアヒルたちのことを気にしているのは、弱い者、小さい者への少年らしい気遣いではないでしょうか。サリンジャーは1965



セントラルパーク



Kaleidoscope 第34号はいかがでしたか？

皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2011年2月10日発行

発行責任者: 前田隆子

編集協力: 内田香織



カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011 横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>